

## 〔学会紹介〕

# 「中国同盟会設立100周年記念国際シンポジウム —日中関係への回顧と展望—」参加記

戸 部 健

## I

去る2005年12月10日、千葉商科大学（千葉県市川市）において「中国同盟会設立100周年記念国際シンポジウム—日中関係への回顧と展望—」（主催：特定非営利活動法人中日学術交流センター・日本華人教授会議）が開催された。国内外より16人の報告者が立ち、活発な議論が展開された。来場者も多く、ざっと見た感じではその数は八十人ほどではなかったかと思われる。以下シンポジウムの内容について紹介し、あわせて感想を述べたい。

## II

開会式ではまず程永華氏（中華人民共和国駐日大使館公使）・朱建榮氏（東洋学園大学）・野沢豊氏による挨拶があり、その後章開沅氏（華中師範大学）・山田辰雄氏（放送大学）による基調講演があった。

章開沅「百年後から見た同盟会」は中国同盟会成立の過程を検証することを通して、現代における同盟会の意義を説いた。山田辰雄「もう一つの中国革命—橋樑・陳公博・江沢民」は、橋樑・陳公博が模索した中国革命の方法—小ブルジョワジーが革命において積極的役割を果たす—を考察し、その現代的意義を問うた。

個別報告はテーマ別に3つのセッションに分けられた。第1セッションのテーマは「中国同盟会・辛亥革命と近代日中関係史」で、四本の報告があった。

吉澤誠一郎（東京大学）「革命手段の模索—暗殺か蜂起か」は政治運動を実行するための手段について清末の運動家たちがどのように考えていたのかを、手段の有効性と正当性という二つの問題に焦点を当て丹念に追った。王笛（テキサス A&M 大学）「エリート革命から大衆革命へ—孫中山と辛亥革命研究に関する再思考」は孫中山などエリートの動きに注目しがちだったこれまでの辛亥革命研究を批判し、民衆と政治の繋がりについてさらに探求する必要性、ひいては政治史と社会史の結合の必要性を主張した。郭世佑（中国政法大学）「反省と批判—孫文と梁啓超が回想する辛亥革命を中心として」は、辛亥革命について回想した孫文と梁啓超両者の文章に着目し、そこにあらわれた認識の違いを比較検討することで、辛亥革命の更なる客観的評価を試みた。三輪雅人（関西外国語大学）「孫文と『革命』と『建設』」は、孫文言説における「革命」と「建設」の関係を思想的に論じた。以上四氏の報告後、狭間直樹氏（京都産業大学）によるコメント、およびフロアからの質問があった。

約一時間の昼休みをはさみ午後の部となった。第2セッションのテーマは「戦争と平和、対立と相互理解への道のり—日中関係の100年」で、5本の報告があった。

馬敏・洪振強（ともに華中師範大学）「最近二十年の中国同盟会研究に対する論評」（報告は馬敏氏）は、ここ二十年間の同盟会研究について回顧した上で今後取り組むべき研究テーマ・方法などについて指摘した。許介麟（台湾日本総合研究所）「日本植民地支配賛美論総批判」は、日本が台湾を支配した目的、後藤新平の『日本膨張論』の性質、戦後台湾政治における植民地時代の影響などについて概観することで、「日本植民地支配賛美論」を批判した。楊天石（中国社会科学院近代史研究所）「孔祥熙による和解活動に対する蒋介石の妨害—抗戦期中日関係の再研究・その2」（書面報告）は、日中戦争のさなか秘密交渉の場で日本との和平を進めようとした孔祥熙の動きと、それを阻止しようとした蒋介石の動きそれぞれを档案等の史料を駆使して詳らかにした。熊達雲（山梨学院大学）「日露戦争から柳条湖事件まで—張学良の口述歴史から見る中日関係の変貌」は、日露戦争から柳条湖事件までにおける日本の中国政策の変化を張学良のインタビュー記録などを利用して跡付けた。武上真理子（神戸学院大学）「米国総領事 T. R. ジャーニガンと日清戦争—日本人留学生スパイ容疑事件をめぐる」は、日清戦争開戦期の在上海アメリカ総領事であった T. R. ジャーニガンの国際法論・中国論・日本論を分析することで、当該時期のアメリカが日中両国に対しどのようなまなざしを向けていたのかを明らかにした。各報告後、久保田文次氏（山梨県立大学）によるコメント、およびフロアからの質問があった。

若干の休憩をはさみ第3セッションに移った。テーマは「歴史から未来へ—アジア共同体の理念・運動と問題点」で、5本の報告があった。

虞和平（中国社会科学院近代史研究所）「日支実業協会と民国初期における中日商人外交」は、神戸の華僑と神戸・大阪の日本人商人との合同により結成された日支実業協会に注目、その成立過程・組織の性質について考察し、さらに協会が積極的に取り組んだ民間外交の意義について論じた。坂元ひろ子（一橋大学）「歴史・韓流・『反日』運動と『共生・非核』アジアの練習」は、我々日本人が、過去における自らの植民地主義への清算未完性とあいまって深まる「アメリカの内化」から脱却した「アジア」の可能性を模索するために、非戦・非核のシステムの追求による共生を目指していくべきと唱えた。凌星光（日中関係研究所）「第三次国共合作と米中・日中関係への影響」は、中国同盟会創立が中国国民党と中国共産党に与えた影響、第一次・第二次・第三次（2005年）国共合作の意義、第三次国共合作が米中関係と日中関係に与える影響についてそれぞれ解説した。蔡建国（同濟大学）「留日学生・民間交流と中日関係—中国同盟会を記念する現代的意義の一側面」は、今後の日中関係構築において留学生交流・民間交流が果たすべき役割について述べた。各報告の後、並木頼寿氏（東京大学）によるコメント、およびフロアからの質問があった。

最後に趙軍氏による総括報告があった。趙氏はシンポジウムの意義について、①中国同盟会設立の意義を明確化させることができたこと、②辛亥革命研究に対する新しい視角を開拓できたこと、③百年間の日中関係について多方面からの論証がなされたこと、④歴史と現実をどう結びつけて、未来をどう築いていくか考えることができたこと、を挙げた。

### III

本シンポジウムは当然中国同盟会設立100周年を記念して開催されたものだが、IIの記述から分かるように中国同盟会以外のテーマを扱った報告も多く見られた。実際中国同盟

会関係の報告は章開沅氏と馬敏氏のみであり、むしろ少数であったと言えよう。ではそのほかのものはどのような題材を取り上げていたのか。それは主に「中国近現代における革命」を議論したものと、「近現代における日中関係」を議論したものの二つに分けられる。中でも後者に関連した報告が多くを占めた。以上の事実から、本シンポジウムはどちらかと言えばメインタイトル（中国同盟会設立100周年記念）よりもサブタイトル（日中関係への回顧と展望）の論議に力点を置いていたと言えるだろう。おそらくは日本と中国の関係が何かとギクシャクしている現状に際し、中国同盟会設立100周年という機会を利用して、歴史学の立場から意見を発信していこうという意図があったのではなかろうか。以下、一参加者として感じたことをいくつか述べたい。

基調講演と第1セッションでは、中国近現代史研究において「革命」の持つ意味がますます相対化されてきたことを実感した。中国共産党中心のいわゆる革命史観が力を失って以来、中国革命を社会主義中国建設のステップとして捉える視点は絶対性を失い、それに代わって革命が当時の中国の政治・経済・社会・文化各方面に対してどのような意味を持ったのかを多面的に見ようとする研究が活発に行われるようになってきている。そうした趨勢は本シンポジウムのいくつかの報告についても見ることができた。山田・吉澤・王笛・三輪各氏による報告がそれにあたる。

とりわけ筆者の興味を引いたのが、民衆から見た辛亥革命という論題を取り上げた王笛報告である。民衆と革命との関係に注目した研究はすでに多いが、本報告はそこに民衆の「生活」という新たな視点を加えた。ここから氏がイメージする民衆とはこれまでよく言われてきた「封建勢力打倒に向けて闘う革命的な民衆」ではなく、政治や経済の変動に翻弄されながらも自らの生活基盤を守ることを第一にしたたかに生きていた民衆だということが分かる。彼らにとって革命とは何だったのか。時には革命に参加し、また時には革命を裏切った彼らの行動の具体的なあり方を解明することが今後更に必要となろう。

また山田氏の報告も極めて示唆に富むものであった。氏は中産階級主体の革命を模索する橋樑・陳公博らの動きを「もう一つの中国革命」と位置づけることで、革命を人民共和国内立・社会主義国家建設に完結するものとして捉えるこれまでの枠組みを相対化した。橋らの思惑は結果的には成就しなかったが、だからといって直ちにそれを研究するに値しないものと決め付けることはできない。むしろ実現しなかった様々な革命構想を丁寧に読み解いていくことこそ、近現代中国が有していた可能性と限界性をより深く理解する上で重要ではなかろうか。

第2セッション以降では、歴史経験の生かし方について深く考えさせられた。中国同盟会が成立してから百年の間に日中両国がお互いの交流を通して積み重ねてきた経験はすでに膨大なものに上る。それらの中には当然両国にとって不幸な経験となってしまったものも多いが、その一方で今後日中両国、およびアジア全体が共存していく上で参考とすべき経験もまた少なくない。その意味で第3セッションでの議論は筆者にとって誠に意義深いものであった。

中でも日支実業協会の検討を通し日中間の民間外交のディテールに迫った虞和平氏の報告は現在の日中民間経済外交を思考するにあたって参照する価値がある。こうした地道な基礎研究を粘り強く積み重ねていくこと、それこそが歴史認識をめぐる両国人のいがみ合いを解消するためのゆっくりではあるが確実な方法であると言えよう。

上記のように、シンポジウムは概ね満足いくものであった。ただしその一方で若干残念に感じた点もあった。

第一は報告者の多くが日本人と中国人によって占められていたことである。中国同盟会研究に関していえば台湾や韓国、そして欧米における研究も決して無視できないものであり、もしこうした地域からも報告者が立ったならば、さらに充実した議論ができたであろうと思われる。

第二は討論時間が短かったことである。シンポジウムのプログラムにはⅡで述べたとおりそれぞれのセッションごとに全体討論の時間が組まれていたが、時間制限を超過した報告もあり、時間が押したため、結果的に討論の時間が削られることになった。フロアから質問が多く出され、議論が白熱したにもかかわらず、そのほとんどが時間切れという理由で中途半端で終わってしまったのは非常に悔やまれた。

#### IV

以上、シンポジウムの内容を紹介し、感想をいくつか述べた。若干不満な点もあったが、総じて言えば大変有意義なシンポジウムであった。報告者の招待や会場の手配、当日の運営など、主催者のご苦勞を思うと頭が下がる。謹んで敬意を表したい。

110周年記念シンポジウムが開かれるだろう2015年には世の中はどう変わっているのか、分からない。ただその頃までにはもう少し日中関係がよくなっていてくれればと願わずにはいられない。

註：中国語報告の題名はすべて筆者が日本語に訳した。オリジナルは以下の通り。

中文題名（報告順）

章開沅〈百年以後看同盟會〉。

王笛〈從精英革命到民衆革命——關於孫中山與辛亥革命研究的再思考〉。

郭世佑〈省察與評判——以孫中山與梁啟超迴眸中的辛亥革命為中心〉。

馬敏・洪振強〈近二十年來中國同盟會研究述評〉。

楊天石〈蔣介石對孔祥熙謀和活動的阻遏——抗戰時期中日關係再研究之二〉。

虞和平〈日支實業協會與民國初年的中日商人外交〉。

蔡建國〈留日學生・民間交流與中日關係——紀念中國同盟會的當代意義之一〉。